

名前 () 日づけ (/) できた数 (/ 28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この話の山は「三兄弟の対比」と「なむ・なめれの識別」、そして三重尊敬（最高敬語）です。

あらすじ＝五月雨の季節も過ぎたころ、五月下旬の月のない闇夜に、恐ろしいほど激しい雨が降る中で、花山院が「こんな夜に一人で行けるか」と人々をけしかける。居合わせた人々が「とても参れません」としりごみする中、道長だけが「どこへなりと参りましょう」と答える。すると帝は道隆に豊楽院、道兼に仁寿殿の塗籠、道長に大極殿へ行けと命じ、命じられた兄二人は顔色を変える。「証拠がない」と言われた道長は、御手箱の小刀を借りて出発。兄二人は物音や人影に負けて引き返すが、道長は平然と大極殿まで行き、高御座の柱を削って持ち帰る。翌朝その削り屑を柱に当てると、少しも食い違わなかった。

花山院の御時（おほんとき）に、五月（さつき）下（しも）つ闇（やみ）に、五月雨（さみだれ）も過ぎて、いとどろおどろしくかきたれ雨の降る夜、帝、さうざうしとや^①思しめしけむ、殿上（てんじやう）に^②出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々、物語申しなどし給うて、昔恐ろしかりけることどもなどに申しなり給へるに、「今宵（こよひ）こそいとむつかしげなる夜^③なめれ。かく人がちなるだに、気色（けしき）おぼゆ。まして、もの離れたる所などいかならむ。さあらむ所に^④一人往（い）なむや。」と仰せられけるに、「^⑤えまからじ。」とのみ申し給ひけるを、入道殿（にふだうどの）は、「いづくなりとも^⑥まかりなむ。」と^⑦申し給ひければ、さるところおはします帝にて、「いと興（きよう）あることなり。さらば行け。道隆（みちたか）は豊樂院（ぶらくるん）、道兼（みちかね）は仁寿殿（じじゅうでん）の塗籠（ぬりごめ）、道長（みちなが）は大極殿（だいくでん）へ行け。」と仰せられければ、

〔中略〕また、承（うけたまは）らせ給へる殿ばらは、御気色変はりて、^⑧益なしと思したるに、入道殿は、つゆさる御気色もなく、「私の従者をば具し候はじ。この陣（ぢん）の吉上（きちじやう）まれ、滝口（たきぐち）まれ、一人を、『昭慶門（せうけいもん）まで送れ。』と仰せ言賜（た）べ。それより内には一人入り侍らむ。」と申し給へば、^⑨証なきこと。」と仰せらるるに、「げに。」とて、御手箱に置かせ給へる小刀（こがたな）申して立ち給ひぬ。〔中略〕「子四つ（ねよつ）。」と奏（そう）して、かく仰せられ議するほどに、丑（うし）にもなりにけむ。

中関白殿（なかのくわんぱくどの）、陣まで^⑩念じておはしましたるに、宴（えん）の松原のほどに、そのものともなき声どももの聞こゆるに、術（ずち）なくて帰り給ふ。栗田殿（あはたどの）は、露台（ろだい）の外まで、^⑪わななくわななくおはしたるに、仁寿殿の東面の砌（みぎり）のほどに、軒（のき）と等しき人のあるやうに見え給ひければ、ものもおぼえて、^⑫身の候はばこそ、仰せ言も承らめ。」とて、おのおの立ち帰り参り給へれば、御扇をたたきて笑はせ給ふに、入道殿は、いと久しく見えさせ給はぬを、いかがと思し召すほどにぞ、^⑬いとさりげなく、ことにもあらずげにて、参らせ給へる。「いかにいかに。」と問はせ給へば、いとのとやかに、御刀に、削られたるものを取り具（ぐ）して奉らせ給ふに、「は何ぞ。」と仰せらるれば、「ただにて帰り参りて侍らむは、証候ふまじきにより、高御座（たかみくら）の南面（みなみおもて）の柱のもとを削りて候ふなり。」と、^⑭つれなく申し給ふに、いと^⑮あさましく思し召さる。

〔中略〕なほ疑はしく思し召されければ、つとめて、「蔵人（くらうど）して、削り屑（くづ）をつがはしてみよ。」と仰せ言ありければ、持て行きて押しつけて見たうびけるに、つゆ違（たが）はざりけり。

語注 花山院=花山天皇。この場面の帝。五月下つ闇=五月下旬の、月の出ない闇夜。かきたれ雨=はげしく降りそそぐ雨。さうざうし=もの足りない・物寂しい。殿=清涼殿の殿上。天皇の近くに昇ることを許された人が控える所。むつかしげなり=気味が悪い。人がち=人が多いこと。気色=（不気味な）気配。まかる=「行く」をへりくだって言う語。入道殿=藤原道長。中関白殿=藤原道隆。栗田殿=藤原道兼。三人は兄弟で、道長が末弟。仁寿殿=内裏（天皇の住まい）の中の殿舎。豊樂院=極殿=内裏の外、大内裏の中にある大きな建物で、夜は人けがない。塗籠=周りを壁でぬりこめた部屋。吉上・滝口=宮中の警備にあたる下級の役人。昭慶門=大内裏の門の一つ。子四つ=午前零時半ごろ。丑=午前一時〜三時ごろ。陣=警護の武士がつめる所。宴の松原=大内裏の中にあつた松林。露台=紫宸殿と仁寿殿の間にある、屋根のない板敷きの所。砌=軒下の敷石のあたり。術なし=どうしようもない。高御座=大極殿の中にある天皇の座。つとめて=翌朝。つがはす=つき合わせる。蔵人=天皇の身近に仕える役人。

A 語句の意味と読み（1～6）

- (1) ⑧「益なし」の読みをひらがなで書き、ここでの意味を書け。
- (2) ⑨「証なきこと」の「証」の読みをひらがなで書き。
- (3) ⑩「念じて」の意味を書け。
- (4) ⑪「わななくわななく」の意味を書け。
- (5) ⑭「つれなく」の、ここでの意味を書け。
- (6) ⑮「あさましく」の、ここでの意味を書け。

B 文法（7～12）

- (7) ①「思しめしけむ」の「けむ」の意味と活用形を書け。
- (8) ③「なめれ」を文法的に説明せよ。已然形で結ばれている理由にもふれること。
- (9) ④「一人往（い）なむや」の「往な」と「む」を、それぞれ文法的に説明せよ。
- (10) ⑤「えまからじ」の「じ」の意味と活用形を書け。
- (11) ⑥「まかりなむ」の「なむ」を文法的に説明せよ。
- (12) ⑫「身の候はばこそ、仰せ言も承らめ」の「め」について、もとの助動詞と活用形を書け。

C 主語・敬意の方向（13～17）

（13）①「思しめしけむ」の「思しめす」は何の敬語か。また、誰から誰への敬意か。

（14）②「出でさせおはしまして」の敬語を文法的に分け、このような重ね方の呼び名を書け。また、この動作の主は誰か。

（15）⑦「申し給ひければ」の「申し」と「給ひ」は、それぞれ誰への敬意を表すか。

（16）⑨「証なきこと」は誰の言葉か。また、この一言は道長にどうすることを求めているのか。

（17）⑬「いとさりげなく、ことにもあらずげにて」の主語は誰か。本文中の呼び名で書け。

D 口語訳（18～21）

（18）④「一人往（い）なむや」を、「や」のはたらきがわかるように現代語訳せよ。

（19）⑤「えまからじ」を現代語訳せよ。

（20）⑫「身の候はばこそ、仰せ言も承らめ」を現代語訳せよ。

（21）⑭「つれなく」申し上げた道長の言葉（「ただにて帰り参りて侍らむは…削りて候ふなり。」）を現代語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ⑩ 「念じて」 おはしました中関白殿が、引き返したのはなぜか。本文に即して書け。(四十字程度)

(23) ⑪ 「わななくわななく」 おはした栗田殿が、引き返したのはなぜか。本文に即して書け。(四十字程度)

(24) ⑬ 「いとさりげなく、ことにもあらずげにて」とあるが、この道長の様子は、兄二人のどのような様子と対比されているか。本文中の語句を挙げて書け。(八十字程度)

(25) ⑭ 「つれなく」 申し上げた内容（道長が持ち帰ったもの）と、帝がそれを確かめた方法を書け。(八十字程度)

F 文学史 (26～28)

(26) 『大鏡』の成立時代とジャンルを書け。

(27) 『大鏡』は、どのような人物が、どのような形式で語る作品か。語り手の名も挙げて書け。

(28) 『大鏡』を含む「四鏡」を、成立順にすべて書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「なめれ」は「なるめれ」→「なんめれ」→「なめれ」。撥音便の「ん」が書かれない形で、上の「こそ」を受けて已然形。ここが説明できれば③は取れます。②同じ「なむ」に見えて中身が別。④「一人往（い）なむや」はナ変「往ぬ」の未然形＋推量「む」＋反語の「や」、⑥「まかりなむ」は連用形に付く強意「ぬ」＋意志「む」。上が何形かで決めます。③「せ・させ」は使役か尊敬かを条件で決める。使役の相手（～に・～して）が書かれていれば使役、書かれていなくて動作の主が高貴な人なら尊敬（＝二重尊敬・最高敬語）。②は相手が書かれておらず、直前の「帝、」が主語なので二重尊敬です。なお『大鏡』は語り手が道長も特別に高めるので、「最高敬語だから主語は帝」とは決めつけないこと。